

未来ノート

—202Xの君へ—

スピードスケート

しん はま たつ や 新浜立也

努力ゼロだった

100均乾電池だね

転倒からの学び

世界王者の称号

基礎練嫌い 勝てなくなった

その大きな体を操れるようになってくるまで、いくつもの困難を乗り越えた。スピードスケート男子の新浜立也(24、高崎健康福祉大職)は昨年、世界選手権スプリント部門王者に輝いた。183センチの長身を力強い滑りに生かし、日本男子では33年ぶりの快挙を達成した。1996年、北海道別海町で3人きょうだいの末っ子として生まれた。体重は3710g。ぐんぐんと成長し、2学年上の兄優太さん(25)と双子に間違われることもしばしばあった。とにかく活発で、漁師の



●昨年の全日本距離別選手権男子5000mで優勝した新浜立也(中央) ①初めてスケートを滑った3歳ごろの新浜II家族提供



父聖勝さん(52)は「野生児だった」。吹雪の時は喜び勇んで外へ駆け出し、一人で雪かき。母智恵子さん(50)は近所の知り合いから「何か悪いことをして罰を与えているのか」と聞かれ、事情を説明するのに苦労したと笑う。インドア派の姉奈さん(28)や優太さんと違い、自転車や山道を走ったり、家の裏の港で釣りをしたりするのが楽しかった。スケートを始めたのは3歳。優太さんの練習について行った時だった。スケート靴を履き、ペンギンのようにペタペタと歩く。転んでもすぐに立ち上がり、30分のリンクを1周。見る人を驚かせた。小学校に入ると自らスケート少年団へ。地域の大会に出れば、たいがい1位。途中で転びながら大会新記録を出すこともあった。新浜は「勝てるのがとにかく楽しかった」。3年の時に同級生の影響で野球を始めようかと揺らいたが、最後はスケートを選んだ。新浜は「努力はゼロだった」とその頃を振り返る。基礎練習は大嫌いで思い切り滑るだけ。すると、4年ごろから勝てなくなり、次第に楽しむこともできなくなった。「もうやめたい」。6年の時、智恵子さんに伝えられた。すると、「やめるのは簡単だけど、続けるのは難しい。負けたままで終わって悔しくないのか」と返された。新浜は「悔しい」。もう少し頑張ることに決めた。(岩佐友)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。